



苦っ楽しいところ

今朝、リュックを担いで徒歩で通勤してみた。
徒歩約20分、学校に着くとグラウンドで作業をしている野球部から元気な挨拶。
と同時に「教育実習生かと思った」とのつぶやきが聞こえる。
「こんなおっちゃんみたいな実習生はおらんやろ」と、心の中で返す。
天高くさわやかな秋空、歩く（運動）には、よい季節ですね。

さて、中間考査終了。テストが好きな生徒というのは、どれくらいいるのでしょうか。
多くの生徒にとってテストは苦しくて嫌なもの？
テストそのものが苦しいのか、それとも、テストに向けて努力することが苦しいのか……。
確かに苦しかった記憶もあるが、努力が結果として実り嬉しかった記憶もある。

愛媛大学の平松教授は「学校は苦っ楽しいところ」であるといわれた。

勉強を続けていくのは苦しいけれど、難しい問題がわかったら楽しい。

課題追究は苦しいけれど、達成できたら楽しい。

部活動の練習は厳しくて苦しいけれど、技能が上達し試合に勝ったら楽しい。

学校とは、ただ楽しいところではなく、苦しくて辛いこともあるけど、その先にある成功体験で味わうことができる楽しさを実感させるところだ、といわれた。

そういう楽しさを仲間とともに味わうことが大切だ、とも。

苦っ楽しいところであるためには、生徒が安易に喜ぶような活動だけでは達成できない。
目標を少し高めに設定して、生徒の努力を支援し、成功体験を味わわせることが必要。
たとえ失敗したとしても、その過程で成長が実感できるよう評価することも大切。
よい教師は「子供の心に火を点ける」といわれる。
叱咤激励しながら、生徒の心に隠れているやる気スイッチをポンと押してやりたいですね。

図書室前の新刊コーナーにある「本を守ろうとする猫の話」にこんな言葉もありました。

本を読むことは山に登ることと似ている。

愉快的読書もよい。けれども愉快なだけの登山道では、見える景色にも限界がある。

道が険しいからといって、山を非難してはいけない。

一步一步あえぎながら登っていくこともまた一つの登山の楽しみだ。

どうせ登るなら高い山に登りなさい。絶景が見える。

読書もまた楽しいだけでは、その先に得られるものも限界があるようです

最近では愉快的読書を好んでいたけど、時には苦しみながら絶景を目指す努力が必要ですね。

生徒にも「苦っ楽しい」体験へ向かう勇気を与え、その成長を支援していきましょう。